

社団法人

日本書芸院広報紙

Eメール
info@nihonshogein.or.jp
HPアドレス
http://www.nihonshogein.or.jp/

書くよろこび

第1号

平成18年(2006)4月発行

編集・発行人 栗原蘆水

〒540-6591
大阪市中央区大手前1丁目7番31号
OMMビル7階

TEL 06-6945-4501

FAX 06-6945-4505

私たちは児童生徒一般すべての人々の書写の環境を整え、豊かな心を取りもどすため総力をあげて「手書き文字の振興」に取り組んでいます

日本の伝統文化芸術を守り育もう

すばらしい日本語の心を伝えよう

心を映す文字をより大切にしよう

書く楽しさ喜びを通して健やかな心を養おう

美しい文字で潤いのある豊かな人生を送ろう



創刊に寄せて

書道は、我が国を代表する文化芸術として、多くの人々に親しまれております。

上野の東京国立博物館では、1月11日から2月19日まで、中国の書の歴史、その影響を受けながら独自の世界を築いてきた日本の書の展開を、名筆・漢字・仮名の名品を通じて概観する「書の至宝展」が開催され、大変な盛況となりました。

我が国の書道は、隸書、楷書、行書などの字体による変化のみならず、中国大陸から

文部科学大臣

小坂 憲次



伝来した漢字から仮名文字が生まれ、漢字仮名交じりの書、仮名の書、漢字の書など変化のある形態を創造する

など、創意工夫を凝らした独自の書道文化として発展してきました。

品格ある文化の発信を

い、老若男女誰もが親しむことができる文化芸術であります。

また、今日のワープロ、パソコン時代の弊害として文字・活字離れや読解力の低下

書道は、書く楽しみ、見る楽しみ以外にも、題材を選んだり、その背景を考え、筆や用紙など道具を選んだりする楽しみと奥の深

が指摘される中、平成17年7月に「文字・活字文化振興法」が制定され、人類の歴史の中で蓄積してきた知識、知恵の継承や向上、豊かな人間性の涵養並びに健全な民主主義の発達の観点から、同法に基

と、時宜にかなったものであり、今後重要な役割を果たされていくものと期待しております。

- 第11回全日本高校・大学生書道展 6〜7面に作品募集要項と第10回展の詳細
- 第1回全日本小学生・中学生書道紙上展 8面に募集要項
- 2〜3面 手書き文字、識者の意見
- 4〜5面 手書き文字ばんざい!
- 8面 日本書芸院活動報告

手書き文字が今の時代にいかに大切か

「手書き文字」の素晴らしさ

文化庁長官 河合 隼雄

最近、児童文学者の今江祥智さんよりお手紙をいただいた。私が自分の子ども時代の体験を基に某誌に連載をはじめた作品に対する感想である。私は嬉しくて何度も読んだ。そして、その内容もさることながら、それが手書きであることが、私に心を浮き立たせていることに気づいた。

ワープロの字の手紙は味気ない。少し留守にしていると私の家には郵便物がわんざと溜まるが、私はそれらのなかから、まず手書きの手紙を取り出して読むことが多い。

手書きの字はその人の心を伝えてくる。自分は字が下手なので失礼にならぬようにワープロで打っている、という人がいるが、これは心得違いである。上手、下手と関係のないところ



で、肉筆は直接に訴えかけるものを持っているのだ。こつこつしている私自身も実は字が下手である。情けなく思うときもあるが、やはり手書きを守っているのは、前述のように考えるからである。

これと比べると、現在のメールのやり取りは、それはそれなりの意味はあるが、現代社会になって、われわれは効率のよい生活を追求するあまり、人間の生活の豊かで面白い部分を相当に棄ててしまったのだ、と反省させられる。そのひとつが手書き文字である。

団塊の人たちが多く定年退職を迎える。この人たちが第二の人生をはじめるときに、何らかの趣味を持つことは望ましい。そんなときに、書道は実にいいのではないかと。奥を究めるならどこまでもあるが、ともかくまずは始めるのに、他のものに比して取りつきやすいのではないか、と思う。これから日本中でもっと書道が盛んになるのではないかと期待している。

「文字を敬う心」回復を

読売書法会会長 水上 健也



私たち日本人は、戦後六十年、経済成長とともに豊かさを手に入れてきました。しかし、同時に四季に彩られた自然環境や、身近所づきあいの中に込められたきめ細やかな人情といったものを失い続けてきたのではないのでしょうか。その失われたものの中で、もっとも大切にすべきだったことは、「文字を敬う心」ではないでしょうか。そのことを、読売書法会

はなかつたか、と思います。文字を「敬う」大切にすること、それは、それを生み出した人間を「敬う」とい

は古典・伝統に根ざした「本格的な輝きの書」を世に問うこと、また読売新聞は「活字文字や手書き文化を衰退させてはならない」と呼び続けることによつて、訴え続けてまいりました。

その声がようやく、政治家たちの耳に届き、国会で「文字・活字文化振興法」という法律が、全党派の賛

描くこと＝考えること

安藤 忠雄 (建築家、東京大学名誉教授)

建築家という職業柄、話すのと同じくらい描く機会が多い。

友人への連絡、仕事の指示、設計中の建築のアイディアスケッチなど、人と話しながら、考えながらいつも手を動かしている。

人に伝える目的というより、自身の考えを確かめ、整理するために描いているのだらう。そんなメモ、スケッチの類を、仕事机いっぱい広げて、毎日経過させている。

考え迷いながら描くから、文字は不揃いの書きなぐりだし、スケッチの線も手を加える度にならぬ。決してきれいに納まったものにはならない。

だが私には、この方が都合良い。その納まっていな



達による、日本人の文字・活字離れを危惧している。文字にまつわる文化的感性、情緒の喪失という問題もあるが、それ以上に、身体性を弱めていくことで、人間のリアリティが失われ、いくつかが怖い。

どれほど技術が進歩しようともあれ、私はひたすら手を動かすアナログな日々を続けていく。私にとつては描くこと＝考えることであり、それを止めるのは前に進むのをやめることだから。

読み、書きの勧め

漢字は「貴重な記念切手」

河田 悌一 (関西大学学長)

グローバル化という怪物が洋の東西を問わずいたるところで横行している。グローバル化は、市場原理の優先、資本主義と科学技術の重視、競争社会と実力主義の公認などといった考え方にともづくものだ。

文明史的にみれば、それはワープロとパソコンとインターネットの流行に象徴される。

そのために、以下のような現象がみられる。たとえば、アメリカの学者は「プロフェッサー (Professor)」という単語のスペルが、正しく書けない学生が少なくない」と嘆く。また、台湾や大陸の学者は「近頃の

グローバル化という怪物が洋の東西を問わずいたるところで横行している。グローバル化は、市場原理の優先、資本主義と科学技術の重視、競争社会と実力主義の公認などといった考え方にともづくものだ。

文明史的にみれば、それはワープロとパソコンとインターネットの流行に象徴される。

そのために、以下のような現象がみられる。たとえば、アメリカの学者は「プロフェッサー (Professor)」という単語のスペルが、正しく書けない学生が少なくない」と嘆く。また、台湾や大陸の学者は「近頃の



若い世代は正字 (繁体字) がちゃんと書けず、字が下手になって困っている」とのべ、韓国の教授は「漢字で、自分の名前が書けない大学生が、かなりいる」などと、文句をいっているのである。

いうまでもなく、我が日本の青少年も、パソコンと携帯電話の大流行によつて、漢字の読解力は低下し、さらに書く能力が著しく劣化してきている。

このような状況において、欧米の若者がスペルを覚え、東アジアの漢字文化圏で漢字を読み書きする能力を向上させるには、どう

「文は人なり」「書は人なり」というが、実直に字を書くことによつて、人は自己を研鑽し、自己を形成してゆけるのである。と同時に、二十一世紀に生きる私たちは、かな文字を、漢字という「貴重な記念切手」を、自ら筆記することによつて、日本人としてのアイデンティティを確立してゆかねばならないのである。



ワープロの字に親愛生まれぬ

茂山 千之丞 (狂言師)

正直に言いますと私は此の紙面に登場させていた多くのに相応しくない、若しくは資格のない人間だと思ふのです。と言いますのは、私は手紙や依頼された原稿の類は全てパソコンで製作する人だからです。現に此の文章もSONYのVGC-HX63/HX53シリーズで打ち込んでいます。



私のワープロを始めたのは狂言の台本を整備しようと思いついたのがきっかけでした。狂言には能の謡本のような刊行されたものはありません。古典文学集等に収められたものはありますが、実演のための台本としては用を足しません。今プロの狂言作者が台本として使っているのは、全て誰かの元本を写した手書きのようなものなのです。昔の

その間、かなり熱心に作業を続けました。現在上演している演目の九十五パーセント、二百番の作品を入れし終りました。若い連中は喜んで使っています。しかし、近年に掛かることが見え始めました。台本をぞんざいに、粗末に扱っていたこと。私のワープロ機が登場す

るまでは、父が長年をかけて筆で書き上げたものを使っていました。それを自分で書き写すか、又はコピーするかの違いによってセリフを覚え、稽古をしていました。そしてその当時はその台本を丁寧に扱っていました。少なくとも最近のように投げ出したり、楽屋の棚の上に忘れて帰るようなことは滅多にありませんでした。それは恐らく、手書きの本に対する畏敬、或いは親愛の気持ちは、プリントされたものからは決して生まれてこないからではないか。そしてその謙虚さを失った心が、狂言そのものの舞台の上に悪い影を投げかけるのではないだろうか。大変気掛かりです。

私は今、便利さのみを考えて狂言の台本をワープロ化したことが、果たして正しかったか否かと、深く思い煩っていることです。

だんだん字が下手になる大人

中西 進 (京都市立芸術大学学長)



子どもは字が下手だとされている。だから小学生のころからよく練習させ、大人になるとりっぱな字が書けるようになる。と、一般には思われている。だからよく広告などに、いかにも子どもらしい字を書いて宣伝する場合があります。お菓子の宣伝に「ほく大好き」などと書く手合いである。成功した例は芥川龍之介全集。死後刊行され

た書物の文字は遺児のもの、で、大いに味わいがあった。ところが、である。私はこの三年間に三十校ほどの小学生(および少数の中学生)の作文を見る機会をえて、驚いた。大半の子どもが、何と素敵な字をかく

こと。カナタギ流の字は、むしろ少ない。ましてや、いかにも子どもらしい字というのとはほとんどなくて、下手な字が若干ある、といったぐあいであつた。広告に見られる子どもの字は、大人がいかにも子どもの字らしくみせかけたもので、この経験以後は俗悪なヤラセに見えて仕方ない。

一方、近ごろの大人の字の下手さはひどい。要するに小学校の書き方教育は十分成果をあげているのに、それ以後の成長過程で、ワープロやメールにた

よる結果、字は急激に下手になっていくのだと、私は確信した。これからは、字を見て年齢を判断する場合、上手な子ども、下手な大人と考えるべきだ。これは日本にとつての、深刻な問題ではないか。書芸院主催の手書き大会でも、字を書いているのは全員子どもで、大人は保護者、しかも母親しかない。そうではない。これからは大人向けの講習会が必要だし、会社でも社員に一定の手書き能力を求めてはどうか。入社試験に手書き能力を

文字はあたたかい

手書き文字には相がある

もず 唱平 (作詞家、大阪芸術大学客員教授)

当職の生活領域を印字が占領してしまつた。郵送されてくるダイレクト・メールにカード利用明細書、FAXでくる職域団体からの連絡、ボランティア活動のお知らせ等々、みんな印字。せめて宛名くらい手書きであつてほしいと思つて、九割方そうでない。どなたの日常もこんな風なんだろう。

利便性を追求するのは文明のおもむくところ。異を唱えるのはむなし。詮方ないことかも知れない。でも業腹だ。印字には味がない、温みがない、情がないとみんながいうけど、この

便利さには抗うことが出来ないうである。当職に手書きを要求するのはクレジット・カードのサイン以外では、仕事の連れ合いである作曲家くらいなもの。新聞社も雑誌社も原稿はEメールという。たしかに印字の便利さは驚く。パソコンと向かい合うことがなくても、ケイタイの文字表示盤を叩くだけで送稿可能。ジャングルの中からでも、砂漠のど真ん中からでも発信出来るの

だ。呑み友達にノート・パソコンを持ち歩く新聞記者がいる。彼はどこで呑んでも

誰と呑んでも膝の上パソコンを置き、テーブルの端にケイタイを載せる。臨戦態勢だ。話が盛り上がっていても着信音が鳴ると即座に左手でケイタイを掴む。何

知れぬ。当職は彼がキーボードを叩き出し、手あきになるまで鼻白んだ気分を待つ。この男との付き合いを考えねばとふと思つたりする。

今年届いた賀状も切なかつた。せめて宛名くらい手書きで寄せたいとくくなるほど、三分の一は印字。勝手なもので、斯くいう当職自身にタック・シールの宛名をはって出した賀状があつて、その自家撞着ぶりに苛まされる。

そんな矢先、うれしい郵便物が届いた。S大学のヒープ講座(社会で主導的役割を果たせる女性を育てるためのもの)受講生のレポートの束。昨年暮れにお呼びが掛かつて出かけて行って、当職が喋つたこと



め、学校図書館の地域への開放も促しています。さらに、一般に普及しにくい学術研究の出版物や、文字・活字文化の国際的な交流を進めるための翻訳などへの支援を、国や地方自治体に求めています。

市町村に対しては、公立図書館のない場合には設置すること、すでにある場合には資料や司書の人的体制を充実させることを求

置する。国や地方公共団体は司書の充実など人的体制を整備し、資料の充実を図る。学校図書館を開放する。

文字・活字文化の海外への発信を促進。翻訳の支援をする。

【国際交流】

【地域での振興】

【基本理念】

【目的】

文字・活字文化振興法が施行

国民が本や新聞など活字に親しみやすい環境の整備を図ることを目的に、平成

十七年七月、「文字・活字文化振興法」が施行された。「文字・活字文化の日」と定められた読書週間初日の十月

二十七日には、各地の図書館などで様々な催しが行われました。

振興法では、「文字・活字文化」とは活字や文字で表現された文章を讀んだり、書いたり、出版したりすること。あるいは、その結果生まれた出版物などの文化的所産であると定義。文字・活字文化の振興策の策定と実施を、国や自治体の責務と

定めています。具体的には、学校教育で「言語力」が十分にはくまれるよう必要な策を講ずることとし、そのため、教職員の資質の向上を図るとしています。また、学校図書館での読書活動の指導にあたる司書教諭や、学校司

【基本理念】

【目的】

【地域での振興】

【基本理念】

【目的】

書くって楽しいネ

文字・活字文化の日制定記念イベント



日本書芸院が企画した第一回「手書き文字ばんざい！」が平成十七年十月十五日、大阪・中之島の大阪国際会議場で開かれた。活字離れに歯止めをかけるのを目的に文字・活字文化振興法が成立し、十月二十七日が「文字・活字文化の日」に制定されたのを記念してのイベントで、親子連れら約三百人が参加。お手本の字を色紙に書いたり、文字の成り立ちを学んだり、文字に親しむ一日を楽しんだ。

大型パネルにわくわく落書き

開会に先立ち、杭迫栢樹・本院副理事長がステージを飾る看板に「手書き文字万歳！」と揮毫し、次いで手書き文字には魂が宿ると挨拶。共催者として、白石喜和・読売新聞大阪本社取締役事業局長からは今日は君たちが主役との挨拶があった。

続いて福光幽石・本院常務理事が文字の成り立ちを解説した。動物の骨や亀の甲羅に刻まれた甲骨文や金文から草書、行書、楷書へ変わってゆく様子を映像を交えながらわかりやすく説明し、子どもたちも興味深そうに聞き入っていた。

次はいよいよ、子どもたちの出演。あらかじめ受付で年齢別に受け取った「手書き」文「字」万歳」を手に、色紙に一字ずつ筆で書き、大きなパネルに貼り付けていった。その後、「字は心の窓なり」「身長がびますように」「サツカーせんしゅになりたいたい」などと、夢や願いごとを短冊に記した。

会場の一角には、紙が貼られた縦二・七メートル、横三・六メートルの大型パネルを七枚貼り合わせた落書きコーナーも設けられ、子どもたちは筆やクレヨン、色鉛筆と思いの筆記具で、動物の絵や好きな言葉や自由のびのびと書いて楽しんでいた。

イベントの締めくくりはゲストタイム。まず、袴にたすきがけの杭迫副理事長が、畳一枚分の画仙紙に力強く「入魂」と揮毫。続いて、京都から招いた舞妓の小桃さんと芸妓の弥千穂さんの「美の競演」があった。小桃さんは「舞」の字を、弥千穂さんは与謝野晶子の歌の一節「今宵あふ人みな美しき」を色紙にあでやかに書いたためた。

当日はあいにくの雨模様だったので参加者の数が心配されたが、広い会場は子どもたちとお母さんらの熱気にあふれ、充実した一日となった。インタビューを受けた子どもたちも、「文字のなりたちが楽しかった」「勉強になりました」「また参加したい」と笑顔で答えていた。

高木厚人・本院常務理事（写真協力）読売新聞大阪による開会挨拶で楽しい一本社



手書きの文字
書写・書道ってすばらしい
きれいに美しく
文字を書こう
の美しさは文化のバロメーター

書こう
 やれば何でもできる
一歩一歩
 成績が上がりまますよ
 満気になりま
 みんな元気いつも笑顔
 水泳のタイを早くも
文字が上手になる
 早く腰痛が治ります
 松理大臣になりたい伊東征哉
 早く腰痛が治ります

主催 社団法人日本書芸院、読売新聞社
後援 NHK大阪放送局、読売テレビ、大阪府教育委員会、大阪市教育委員会、文字・活字文化議員連盟
協賛 あかしや、呉竹、サクラクレパス、ゼブラ、トンボ鉛筆、ぺんてる、墨運堂



参加者の声

(アンケートから、敬称略)

「初めて習字をしたけど、がんばったらできた」
(雲雀丘学園小1年、山本悠人)

「大きな紙に乗かって字を書いたのはとても楽しかった。今度はおっきな筆で書いてみたい」
(甲東小1年、松本あさ子)

「短冊も10枚あったからいろいろ書けた。お話が楽しかった」
(美加の台小3年、田仲比奈)

「落書きコーナーのようにのびのび書ける所はないのでおもしろかった」
(少路小4年、大西純子)

「漢字の成り立ちを教えてもらい、字に興味をもった。字の楽しさを家族や友達に教えてあげたい」
(玉造小4年、近藤紀里)

「落書きコーナーは思う存分書けた。舞妓さんはきれいな着物を着ていて、字もきれいだった」
(郡家小4年、堀綾香)

「一番楽しかったのは落書きコーナー。おもしろい言葉や俳句を作った。また来たい」
(南恩加島小4年、中瀬毅秋)

「一つの字にいろいろな形があったのでびっくりした。いろいろな字に挑戦したけど、一番書きやすかったのはふつ

うの字(楷書)だった」
(城南小5年、大雲祐子)

「習字は好きではなかったけれど、少し好きになったような気がした。今度はもっと多く書きたい」
(郡津小5年、岡田武史)

「文字がどんなふうにしたのかがわかった。色紙に書くのは初めてだったのでいい経験になった」
(桃山小6年、中村美咲)

「今度は紙に字を書いて自分オリジナルのうちわを作りたい」
(旭ヶ丘小6年、金崎智樹)

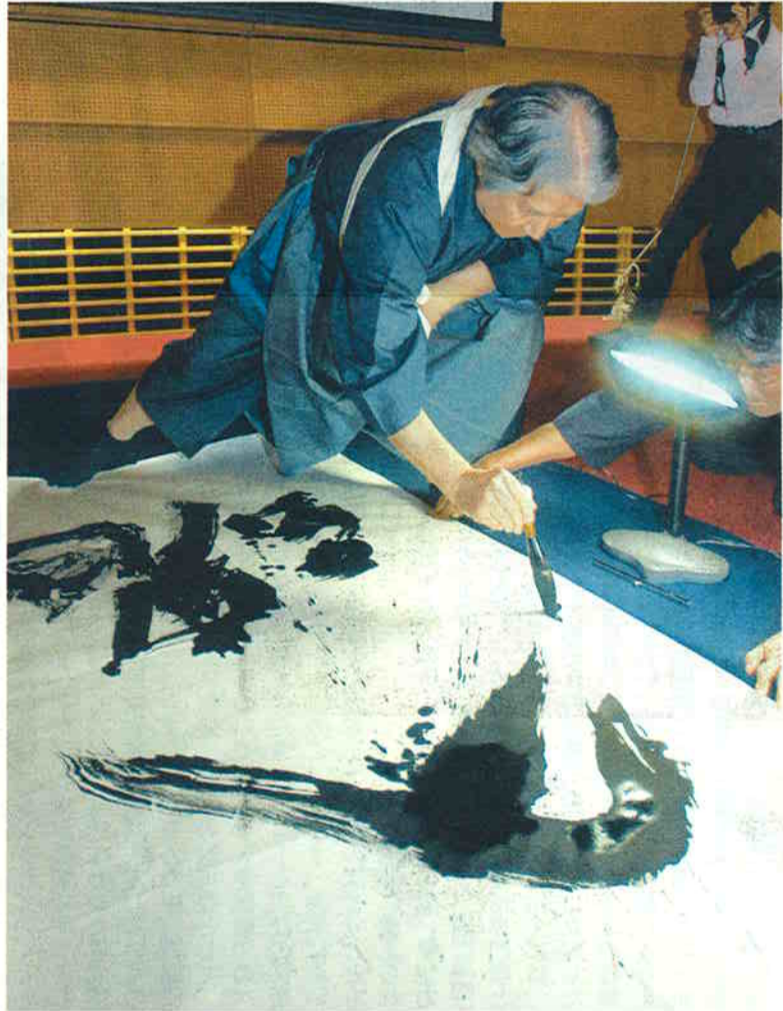
「字の大切さを聞いた。パソコンばかりじゃなく、これからは字を勉強する」
(神田小6年、松岡奏恵)

「習字はあまり好きじゃないけど今日は僕が主役だった。でも思い通り書けなかった」
(太田中1年、倉地彬央)

「20年ぶりに筆を持った。子供と一緒に楽しい時間を過ごすことができた」
(増村典子・43歳)

「文字文化が危機的状況にあるという現状認識をしている。楽しい催し、お祭りの意味は大きいと思う」
(寺本久子・54歳)

「全員の字が展示され、それぞれの気持ちがあふれていた。参加した子供たちと気持ちが一致できてうれしかった」
(中川悦幸・62歳)



主催 社団法人日本書芸院、読売新聞
後援 NHK大阪放送局、読売テレビ、大阪府教育委員会、大阪市教育会、文字・活字文化議員連盟

学生書道のグランプリ

第10回 全日本高校・大学生書道展

応募過去最高1万1455点 作品ぐつと充実

学生書道のグランプリを決める第十回全日本高校・大学生書道展（主催：日本書芸院、読売新聞社）は平成十七年八月二十三日から二十八日まで、大阪市立美術館（天王寺区）で開かれた。十回目の節目となる今回は、全国から漢字、かな、調和体（漢字・かな交じり文）、篆刻の四部門に過去最高の一万四千五百五十五点の力作が寄せられ、最高賞にあたる全日本高校・大学生書道展大賞五十二点と同展賞三百十九点、優秀賞九百九十三点が選ばれた。



会場に若さ弾ける

本院の栗原蘆水理事長は「年々応募数が増え、内容も極めて充実。学生でこれだけ書けるのかと驚いている。特に、高校生の成長が素晴らしい」と話しており、中でも日展や読売展サイズの内容とも充実していた。うち選ばれた千三百六十四点が展示され、訪れた愛好者は若々しく力強い作品に感心して見入っていた。最終日の二十八日には大



阪国際交流センター（天王寺区）で授賞式が行われ、引き続き祝賀パーティー。大分高校（最優秀校）の小野晴治さんと鹿児島県立伊集院高校（優秀校）の池田光遊さんが、指導者を代表してスピーチを述べた。

団体賞・個人賞 喜びの声

最優秀校 大分高校

教諭 小野 晴治



この度は全日本高校・大学生書道展におきまして六年連続の最優秀校の栄を賜ったおかげを持ちまして、同じく六年間連続、大分県民栄誉賞を受賞させていただきました。これもひとえに何処にも所属せず教育現場のみでチャレンジを認めてくださる日本書芸院の先生方のご理解あつての賜物だと考えています。

書道ガールズのテーマは「夢はきつと叶うー」です。毎年四月入学したのホッカホッカの新生一年生に三年生二年生がそれぞれの立場において自分自身のプレゼンテーションを行い、学年に際しては揮毫課題別にユニットを組んで日々研鑽を積み重ねています。夢を叶えるためには具体的なビジョンがなければいけません。私もそれは「書道ガールズ物語で高校生デビューしではじめるー」と言います。

書道ガールズ物語を演出するには、登場人物である、書道ガールズがテーマ「夢はきつと叶うー」のもとにストーリー、全日本高校・大学生書道展に向けて共に生きて、自身の可能性にチャレンジしていくという三要素が必要で、そして高校時代味わった達成感を基に進路決定していくのです。そんな中、進路決定の一つの選択肢として、書道系大学入学試験でのペーパーテストと実技の併用型があります。大学において専門教育の深まりとともに、豊かな感性に支えられた柔軟で視野の広い発想力や思考力を備え、創造的活力に溢れた芸術専門家としての伸長を目指すには、先ず中国の古典に立脚した見聞が感じたいまの書体でなければならぬと考えられます。一切のデフォルメも介在しないありのままの姿で表現できてこそ大学で創造性溢れた書風の構築に繋がると考えられます。しかし、受験のための書道教育と異なった立場で優劣を競うための書道コン

審査結果

個人賞	52	8位	広島県立尾道北高校 (広島)
全日本高校・大学生書道展大賞	319	9位	清水ヶ丘高校 (広島)
全日本高校・大学生書道展賞	993	10位	呉青山高校 (広島)
優秀賞	2,112	大学の部	
準優秀作品	7,979	最優秀校	京都橘大学 (京都) 3年連続3回目
優良作品	(受賞点数)	優秀校	四国大学 (徳島)
団体賞 高校の部		他の優良校	
最優秀校		3位	奈良教育大学 (奈良)
大分高校 (大分) 6年連続6回目		4位	大東文化大学 (東京)
優秀校		5位	岐阜女子大学 (岐阜)
鹿児島県立伊集院高校 (鹿児島)		6位	花園大学 (京都)
他の優良校		7位	岩手大学 (岩手)
3位		8位	京都教育大学 (京都)
埼玉県立松山女子高校 (埼玉)		8位	静岡大学 (静岡)
4位		10位	皇學館大学 (三重)
明誠学院高校 (岡山)			
5位			
奈良県立桜井高校 (奈良)			
6位			
東京学館新潟高校 (新潟)			
7位			
東福岡高校 (福岡)			

優秀校 伊集院高校

教諭 池田 光遊



「書もやはり密室の祈り事である。折り返しは、

人格の陶冶はない。せめて同じ時間を共有する空気の中に連帯や感動があるべきである。しかし、その「夢追い人」になってしまつてはいけない。生徒や保護者の希望が優先されるべきである。本校の生徒や保護者が望むもの、それは時間内の効率のよい練習と学習時間の確保である。本校は進学校であり、その軸にぶれがあつてはならないのである。授業が終わるのが五時、部活動は夏季で六時半まで、「練習オーラの漂う練習をせよ!」、これが最近の私の口癖である。年間

クールで頭角を現すためには古典に立脚しながらも点画・転折等が際立った用筆法で揮毫された作品が奨励される傾向にあります。この相反するものを生徒に理解させ、それぞれの立場で開花させることに教師として醍醐味を感じさせられます。これからも、時代を超えた取り組みとして生徒と保護者と共に書道ガールズ物語を演出していきたいと思

第1回全日本小学生・中学生書道紙上展

- **出品資格** 小学生・中学生の在籍者（平成18年8月31日 作品受付締切時）
- **部門** 小学生の部・中学生の部
- **課題** 自由とする
- **書体** 自由とする ※ただし、毛書体とする
- **紙の大きさ** 半切（縦135cm×横34.5cm）の縦作品に限る
- **出品料** 無料
- **作品受付** 平成18年8月1日（火）～31日（木）
- **作品送付先**
全日本小学生・中学生書道紙上展事務局
〒540-6591
大阪市中央区大手前1-7-31
OMMビル7階（社）日本書芸院内
- **送付するもの**
 - 1 作品
 - 2 出品者受付名簿
 - 3 集計表

- **出品上の注意**
 - 1 作品には学年と姓名を書くこと（学年が小学3年生は小三）
 - 2 出品作品は1人1点とする
 - 3 出品作品は表装せず書き下ろしのままとする
 - 4 出品作品の左下に出品券を貼付すること
 - 5 出品作品は返却しない
- **審査員** 栗原蘆水、井茂圭洞、杭迫柏樹、黒田賢一、吉川蕉仙、劉蒼居
読売新聞東京本社執行役員事業局長 神田俊甫
読売新聞大阪本社取締役事業局長 白石喜和
- **審査および賞**
 - 1 全作品の中から各学年優秀作品（ベスト100予定）を選び認定証および賞品を授与
 - 2 出品者全員に出品証として図書カードを贈る
- **成績発表** 10月中旬読売新聞紙上および本院ホームページにて発表
出品者・代表者にはそれぞれ成績通知を郵送

12月初旬各学年優秀作品（ベスト100予定）掲載冊子を出品者全員に送付
ただし、団体出品の場合は代表者を通じて送付
◆成績証明証を希望する者は、出品者の住所、名前、電話番号、学校名、学年、出品団体番号を明記の上、80円切手を同封し、事務局までお申し込み下さい。（※新聞紙上展に名前が掲載された出品者に限る）
全日本小学生・中学生書道紙上展事務局
〒540-6591
大阪市中央区大手前1-7-31
OMMビル7階（社）日本書芸院内
電話 06-6945-4501
FAX 06-6945-4505
info@nihonshogeiin.or.jp
http://www.nihonshogeiin.or.jp/

沿革と概要

- 昭和21年（1946）11月創立、昭和22年（1947）5月、社団法人の認可を受けています。平成18年（2006）は創立60周年を迎え、これを記念するさまざまな事業を開催します。
- 会員相互の共励琢磨による「書」の本質的研究を通して、我国文化の継承・振興・発展のために活動しています。
- 現在、北海道から沖縄まで全国に約2万人の会員を擁する我国屈指の書道団体です。
- 会員中より文化勲章受章者2名（故村上三島、杉岡華邨）、日本芸術院賞受賞者25名をはじめ、日展ほか全国有名展では入賞・入選はもちろん、役員・審査員をつとめる著名作家を多数輩出し、実力者の多いことでも書道界随一です。
- 毎年、公募を含めた書展や企画展、各種の講習会・講演会を開催し、書の啓蒙と普及、後進の育成に尽力しています。
- 書に関する図書、機関誌会報や会員名簿の刊行に加え、平成18年には広報紙を創刊し、全国に向けて書の楽しさ、すばらしさを発信しています。
- 各府県においてシルバー書道展を開催し、地域の生涯学習に寄与しています。

展覧会

- 日本書芸院展（役員展）および特別展観** 会場：大阪国際会議場（大阪市北区）
毎年春に開催している役員による展覧会です。我国を代表する書家の大作を一堂にご覧いただけます。特別展観を併催し、研究家・愛好家だけでなく広く一般の方が興味を持てる企画で、魅力ある「書」の世界を創造します。

近年の特別展観

- 平成18年 創立60周年記念
「雄大・純朴の書—米山—」「先達13人展」（2つの特別展観を開催します）
- 平成17年 「書にみる祈りのこころ—山本發次郎コレクション、—江戸時代の墨蹟を中心に—」
- 平成16年 「書にみる—新選組と維新の英傑—」
- 平成15年 「剣豪宮本武蔵とその周辺—書画を中心として—」

- 日本書芸院展（2月展・4月展）** 会場：大阪市立美術館（大阪市天王寺区）
毎年2月と4月に会員の作品審査会を行い、出品作品を展示しています。2月開催の「2月展」では二科審査会員の作品を、4月開催の「4月展」では一科審査会員の作品と無鑑査会員の特別賞受賞作品を展示しています。



- 全日本小学生・中学生書道紙上展** 読売新聞紙上
平成18年に第1回展を開催します。小学生・中学生を対象にした全国規模の書道展で、成績優秀作品を読売新聞紙上で紹介します。書写書道の技術向上を図り、書道を通してより豊かな人間形成に役立てることを目的としています。
- 全日本高校・大学生書道展** 会場：大阪市立美術館（大阪市天王寺区）
書の継承・発展のため、次代を担う若者を対象に創設された書道展です。日本書芸院だけでなく読売書法会からも審査員を招聘、全日本の高校・大学生から出品される11000点を超える作品から「学生書道のグランプリ」

を決定、展示しています。

●全国シルバー書道展

シルバー世代を対象に大阪・京都・兵庫・滋賀・奈良・和歌山および三重・岡山および広島で開催しています。現代の高齢化社会を反映し、各地で大変好評を得ています。

●特別企画展・海外展

平成18年4月、創立60周年を記念して「書の国宝 墨蹟展」を大阪で開催し、国宝や重要文化財に指定されている禅宗の高僧による書の逸品ばかりを一堂に集めて展観します。
平成15年（2003）には「海を渡った中国の書 エリオット・コレクション」と宋元の名蹟展を大阪で開催し、王羲之筆「行穉帖」はじめて日本初公開となる中国書蹟の名品の数々を紹介しました。

講習会・講演会

●記念講演会 会場：大阪国際会議場（大阪市北区）

日本書芸院展（役員展）併催の特別展観をより深く鑑賞するため、企画にあった専門家による講演会を開催しています。
平成18年は創立60周年の記念講演会として開催、彫刻家で日展理事長・日本書芸院会員の橋本堅太郎先生を講師にお迎えします。

●夏期講座 会場：大阪国際交流センター（大阪市天王寺区）

会員の書作理念向上のため、分野を越えた視野で教養と識見を高めることを願い、毎年夏に開催しています。近年は外部講師による講演会、院内講師によるパネルディスカッションや講演会を開催しており、毎年各界を代表する著名人に多数ご講演いただいています。

外部講師

- 平成18年 塩川正十郎先生（元財務大臣）
- 平成17年 阿川弘之先生（作家） 山下和彦先生（株）大阪国際会議場代表取締役）
- 平成16年 森清範現下（清水寺貫主） 今井政之先生（陶芸家）

●「手書き文字ばんざい！」文字・活字文化の日制定記念イベント

会場：大阪国際会議場（大阪市北区）
平成17年（2005）7月22日、国民が文字・活字に親しみやすい環境の整備を図ることを目的とした「文字・活字文化振興法」が成立、10月27日が「文字・活字文化の日」と制定されました。これを受け、文字とりわけ手書き文字の一層の普及を願い、親子で楽しく文字に触れて学べるこの大会を開催。参加者の好評を得て、今後も継続して開催します。

出版

●作品集・図録

日本書芸院展（役員展）の作品集および併催の特別展観の図録を毎年出版し、その数は約80種に及びます。

●機関誌・会員名簿

会員向けの機関誌「会報」を年4回、会員名簿を隔年で発行しています。

●研究誌・記念誌

研究誌「書写・書道教育を考える」や記念誌「日本書芸院の歩み」などを出版しています。

●広報紙

平成18年（2006）4月創刊、全国に向けて書の楽しさ、すばらしさを発信していきます。